

災害ボランティア 愛・知・人

水害時の家屋点検・床下作業マニュアル

見えないところを、見る。——被災された方の「その後」を守るために

第1版（2026年9月）

このマニュアルは、水害後の家屋支援に入るボランティア・支援者が、現場で判断を迷わないために作成したものです。国・自治体・学会が示す衛生対策の考え方と、当団体が現場で積み上げてきた家屋点検の実務を、ひとつの流れにまとめています。

建物の構造や被害の程度によっては専門的な判断が必要です。判断できない場合は無理をせず、専門業者・行政・当団体にご相談ください。

現場カード（この 1 ページだけは必ず読む）

清掃 → 乾燥 → 消毒。この順番を絶対に崩さない。

汚れが残ったまま、濡れたままで消毒液をかけても効果はほとんどありません。消毒は「仕上げ」であって「解決」ではありません。

	工程	要点
1	説明・同意	作業範囲と撤去するものを依頼者に説明し、必ず同意を得てから着手する。
2	記録写真	着手前の状態を撮影する（罹災証明・保険請求に使われる）。
3	養生	床・壁・襖・敷居・動線を先に養生する。養生は「仕上げ」ではなく「最初の仕事」。
4	点検	床下・壁内を実際に見る。見える範囲だけで判断しない。
5	排出	水を抜き、土砂を出す。壁→床の順で撤去する（足元の安全確保）。
6	清掃	部材をブラッシングし、泥・木片・ごみを残さない。
7	乾燥	送風機で風を通す。ここに一番時間をかける。
8	消毒	乾いた面に、必要な範囲だけ。噴霧は原則しない。
9	確認	依頼者と一緒に作業後の状態を確認し、今後の注意点を伝える。

やってはいけないこと

- 床下に石灰をまく（乾燥を妨げる。消毒の代わりにはならない）
- 濡れたまま・汚れたままの消毒
- 次亜塩素酸ナトリウムの噴霧（吸い込みの危険）
- 依頼者の同意のない撤去（元に戻せない判断は必ず確認）
- 床下に単独で入る（必ず 2 人以上・換気しながら）

装備

長袖・長ズボン／厚底の靴・長靴／丈夫な手袋／防じんマスク／ゴーグル／ヘッドライト。ケガをしたら流水でよく洗い、深い傷・汚れた傷は破傷風のおそれがあるため医療機関へ。

1. 作業に入る前に

現場で最初に起きるトラブルの多くは、技術ではなく「説明していなかった」ことから生まれます。

1-1 依頼者への説明と同意

作業前に、①何をどこまでやるのか ②何を撤去するのか ③どのくらい時間がかかるのか ④作業後に何が残るのかを口頭で説明し、同意を得ます。特に床板・壁板・断熱材の撤去は元に戻せません。「あとで説明しよう」は通用しません。

その家に住み続けるための作業です。私たちが良かれと思って進めた撤去が、依頼者にとっては想定外の出費や喪失になることがあります。迷ったら、手を止めて確認します。

- 撤去するものは、可能な限り現物を見せながら説明する
- 判断に迷うものは残す。捨てるのはいつでもできる
- 思い出の品・写真・仏具などは、依頼者の指示なしに触らない

1-2 記録写真

着手前・作業中・完了後の写真を撮ります。被災された方にとって写真は、罹災証明の申請や保険の請求、後日の相談の根拠になります。建物の外観（四方向）、浸水の高さが分かる箇所、床下の状況を押さえます。

- 浸水高さは、メジャーや人を一緒に写して分かるようにする
- 床下は暗いので、ライトを当てて複数枚撮る
- 個人が特定できるもの（表札・郵便物・personalな室内）は広報に使わない。撮る場合も公開前に確認する

1-3 安全装備と健康管理

浸水した水には、下水や汚物、油、薬品、ガラス片、釘が混ざっています。「見た目がきれいな泥水」でも同じです。

- 服装：長袖・長ズボン、厚底の靴または長靴、丈夫な手袋
- 呼吸・目：防じんマスク、ゴーグル（乾いた泥はほこりとして舞う）
- 床下作業：必ず2人以上。換気しながら行う。ヘッドライトと声かけを欠かさない
- ケガ：流水でよく洗う。深い傷・汚れた傷は破傷風のおそれがあるため必ず受診する
- 熱中症：床下・屋内は風がなく高温になる。時間を区切って交代する

2. 養生——最初にやる仕事

養生をしないまま作業に入ると、床下は直っても家は傷みます。修復費用を依頼者に負わせることになります。

2-1 なぜ先にやるのか

床下浸水の場合、床上部分は汚れていないことが多くあります。そこに土足で上がり、泥を運び、根太を足掛かりにすれば、被害のなかった部分まで汚れ・傷が広がります。作業が終われば、依頼者はそこで今まで通りの生活を送ります。自分の家だと思って手を入れます。

また、養生テープは汚れた面には貼りつきません。貼る前に、その面をきれいに拭きます。

2-2 養生する場所と資材

- 撤収時も丁寧に。剥がす際に下地を傷めては意味がない
- 必要資材：養生テープ／ビニールマスカー／ブルーシート／土のう袋／ハサミ／カッター／メジャー／ハケ

場所	資材	ねらい
床・動線	ブルーシート、養生テープ	土足移動と泥の持ち込みから守る。最後の清掃も楽になる
壁・襖・障子	ビニールマスカー	泥の飛散。材質によってはシミが取れない
根太・大引	養生テープ、ビニールマスカー	足掛かりにするため泥が付く。付いたままだとカビの温床になる
敷居	養生テープ、ブルーシート	傷が入りやすく、その傷に泥が入ると取れない。特に重要
台所	養生テープ	公衆衛生上、食中毒・感染症のリスクを避ける



養生の例1 | 根太・大引を一本ずつ包み、動線を確保する



養生の例2 | 廊下は壁面も含めて全面を覆う

3. 床下・壁内の点検

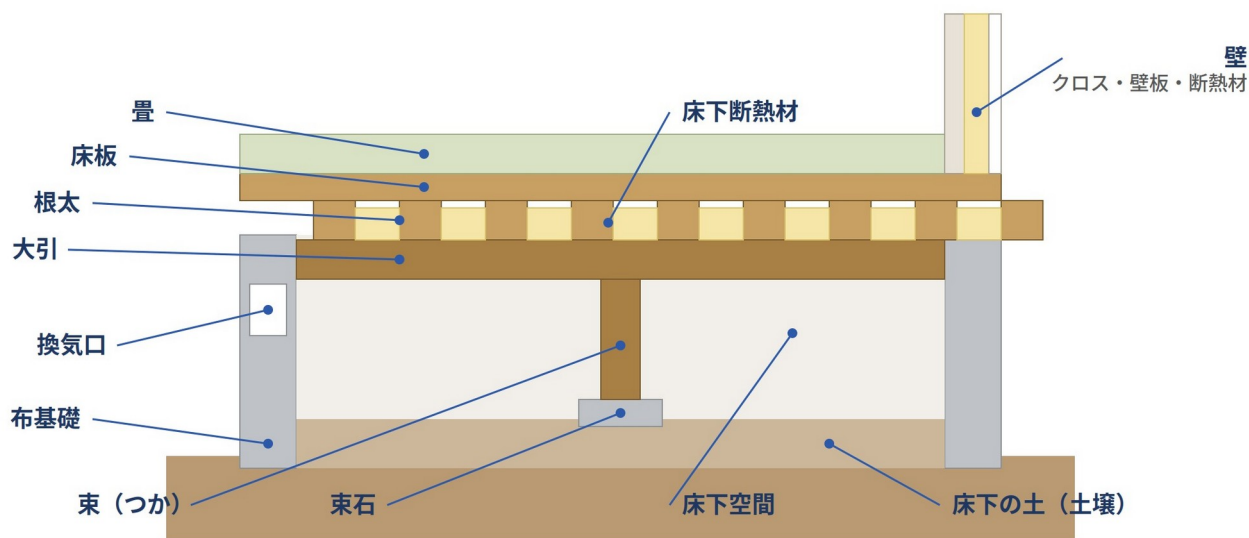
災害後、人は「見える被害」には動きますが、「見えない被害」には動きません。大丈夫だと思い込んだまま時間が過ぎ、数か月後に多額の修復費用として返ってきます。

3-1 点検が先、作業構成はそのあと

床下に入ったものが「土砂」なのか「泥水の沈殿物」なのかで、必要な人数も日数も資材もまったく変わります。点検せずに人を配置すると、足りないか、余るかのどちらかになります。

一度でも浸水した住宅は、床を上げて床下を確認します。ハウスメーカーや建築工法によっては専門的な技術が必要になるため、無理はせず、判断できない場合は持ち帰ります。

図2 床下の各部の名称



浸水したら、床を上げてこの空間を必ず確認する。見える範囲だけで判断しない。

- 和室：畳を上げ、床板をバールで1枚はがす。はがす前に油性ペンで並び順の番号を書いておくと戻せる
- 無垢の床板は再利用できるので、ていねいにはがす
- 確認だけで済めば、床板は元に戻せる
- 壁：床上浸水があれば壁内も確認する。近年の家屋は壁内に断熱材が入り、通気性が悪い

3-2 何を見るか

確認項目	見るポイント
水・土砂の残留	たまり水の有無、土砂の量と深さ、泥水の沈殿物か土砂か
基礎の形式	布基礎／ベタ基礎／基礎なし。水が抜けるか、たまるか
通気の状態	換気口の位置と数、中基礎で空気がよどむ場所がないか
断熱材	グラスウールが濡れていないか（何週間も水分を含み続ける）
木部の状態	カビ・変色・やわらかくなっている箇所、白蟻の痕跡
流入したごみ	木片、ビニール、動物の死骸、腐敗物

3-3 災害前からの状態を見分ける

床下環境がもともと悪い家では、今回の水害で乾かしても、しばらくすれば元の湿った状態に戻るだけです。今回の被害なのか、以前からの状態なのかを見分け、依頼者に伝えます。ここを伝えられるかどうか、その家のこれからを左右します。

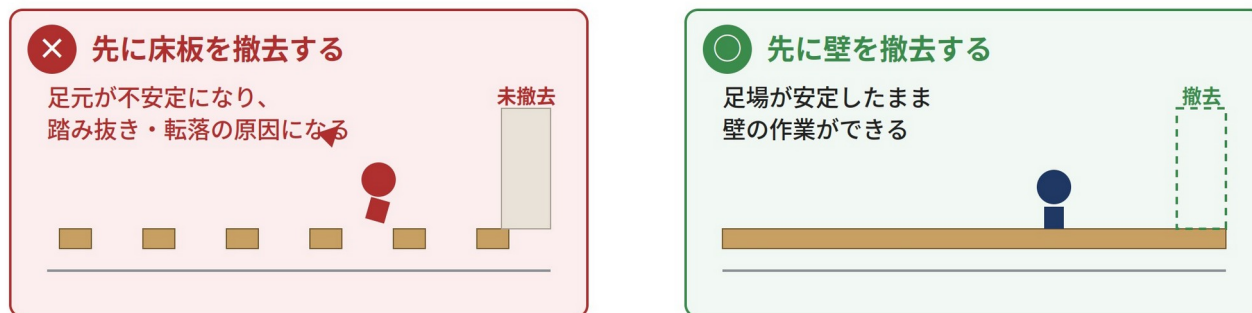
4. 撤去と排出

順番を間違えると、自分たちがケガをします。

4-1 壁が先、床が後

床板と壁の両方を撤去する場合は、先に壁から撤去します。床板を先に外すと足元が不安定になり、その状態で壁の作業をすることになるため、転落・踏み抜きの原因になります。

図3 撤去の順番——壁が先、床は後

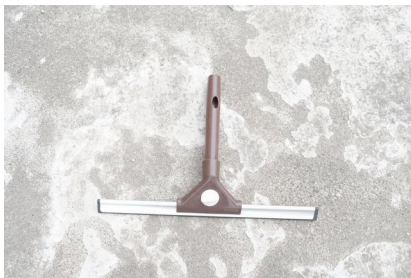


床板と壁の両方を撤去する場合は、安全性を考えて必ず壁から撤去する。

4-2 土砂出しの手順

1. 侵入口のある部屋を養生する
2. 床板を全面撤去、または作業に必要な侵入口を確保する
3. 土砂出しと排水を行う
4. 作業後の清掃を行う
5. 依頼者と一緒に作業後の状態を確認する
 - 土砂が大量に流れ込んでいる場合は排出する
 - 微量の泥や泥水の沈殿物程度であれば、元の土と掻き混ぜ、乾燥後に木部をブラッシングして消毒するだけで足りる場合がある
 - 養生をしていても、なるべく周囲を汚さない意識で運ぶ
 - 不要になったものは作業しながら片付ける。釘は必ず抜き取る

用途	資機材
土砂出し	剣スコップ、平スコップ、ミニスコップ、十能、テミ、土のう袋
排水	水中ポンプ、バケツ、ちりとり、水切り（スクイジー）、ぞうきん
清掃	デッキブラシ、ブラシ類、高圧洗浄機（使用は状況により判断）
乾燥	送風機、サーキュレーター、延長コード
照明	ヘッドライト、投光器



水切り（スクイジー）

撮影：竹下和輝



バケツ

撮影：竹下和輝



そうきん

撮影：竹下和輝

4-3 排水の進め方

6. 水中ポンプで排水する
7. 床下が土の場合は、土を掘り下げて窪みをつくり、そこにポンプを設置して排水する
8. 床下がベタ基礎（コンクリート）の場合は、ポンプである程度排水したあと、残りをちりとり等で汲み上げ、最後是水切りで水を集めて雑巾で吸い取る

4-4 断熱材の扱い

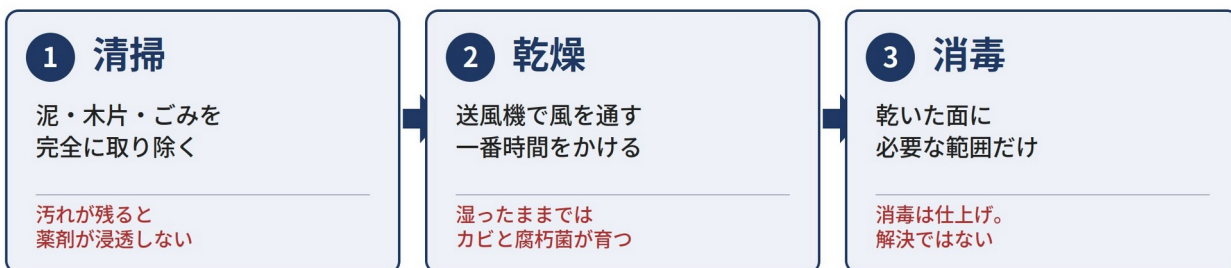
- グラスウールの断熱材は、濡れると何週間も水分を含んだままになる。カビの発生源になり、上の床板も傷めるため撤去する
- 発泡系の断熱材は撤去の必要はないが、状況により取り外して洗浄し、元に戻すこともある
- 壁のクロスは継げないため、天井以外は剥がし、浸水高さに応じて 90cm または 180cm で切断して断熱材を取り出す
- 浸水の程度によっては、壁板と断熱材をすべて取り除くこともある
- 撤去後は部材を清掃し、乾燥させてから消毒する

5. 清掃とブラッシング

消毒より先に、汚れを落とすこと。清掃が不十分だと、消毒は効果を発揮しません。

5-1 やること

図1 順番を守る —— 清掃 → 乾燥 → 消毒



この順番を飛ばすと効果はほぼゼロ。濡れたまま・汚れたままの消毒は、やっていないのと同じです。

※ 屋内（食事・睡眠をする場所、手の触れる場所）は消毒する。床下・屋外は原則として清掃と乾燥を優先し、汚水の混入・動物の死骸・厚い泥の堆積があった場合に消毒する。

- 床下にごみを残さない。特に流れ込んだ木片は、カビと白蟻の発生源になる
- 部材に残った泥・ほこりは湿気を呼び、カビにつながる。ブラッシングで落とす
- 浸水した水には汚物が混入していることが多く、感染症の原因になりうる。ブラッシング後に清掃し、そのうえで消毒する
- 土砂を取り除いたあと、水道水で洗い流し、しっかり乾かす

6. 乾燥——いちばん時間をかける工程

カビと腐朽菌の発生条件は、水分・湿度・温度・酸素・栄養の5つ。このうち一つでも断てば発生を防げます。現場で唯一きちんと断てるのが「水分と湿度」です。

6-1 カビと腐朽菌の違い

カビ（真菌）は表面汚染菌で、木材表面のタンパク質・糖質・アミノ酸を栄養に繁殖します。よく誤解されますが、カビそのもので家屋の耐久性が下がることはありません。

耐久性を下げるのは腐朽菌です。まず一次寄生菌としてカビが発生し、続いて二次寄生菌である腐朽菌が、木材の成分であるセルロース・ヘミセルロース・リグニンを分解しながら成長し、木材を弱らせます。さらに、人にアレルギー性の疾患を引き起こすことがあり、ダニの発生原因にもなります。

つまり、カビが出た時点が「腐朽菌への入口」です。カビを拭き取るのではなく、腐朽菌が育つ環境をつくらないことが目的です。

種類	特徴	出やすい場所
褐色腐朽菌	セルロース・ヘミセルロースを分解。リグニンが残り、その色が表面に出る	針葉樹。床下など風通しが悪く湿度が高いところ
白色腐朽菌	セルロース・ヘミセルロース・リグニンすべてを分解	広葉樹
軟腐朽菌	白色・褐色腐朽菌が腐朽できない高含水率の木材に発生	水が抜けきらない部位



褐色腐朽菌

分解されずに残ったリグニンの色が表面に出る



白色腐朽菌

広葉樹に発生しやすい



軟腐朽菌

水が抜けきらない高含水率の木材に発生

6-2 発生条件（一つ断てば防げる）

図6 カビ・腐朽菌の発生条件——ひとつ断てば防げる



※ カビ（一次寄生菌）が出たあとに腐朽菌（二次寄生菌）が育ち、木材の耐久性を下げる。カビは入口のサイン。

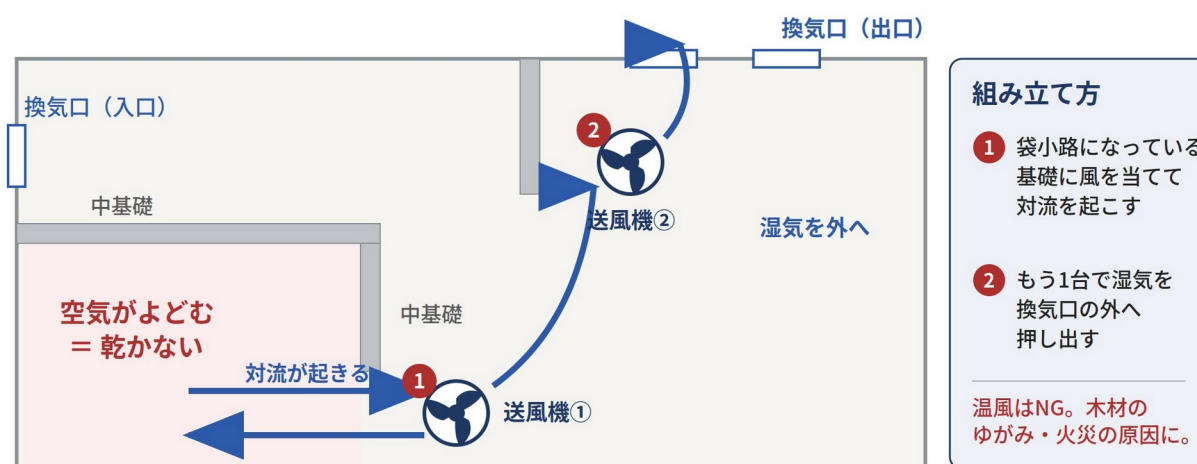
したがって現場で狙うのは、水分と湿度、そして栄養（残さ）です。

6-3 送風機の置き方

水回りの周辺は通気が悪く、増築を重ねた家では基礎が複雑になって空気がよどみます。湿気を外へ出したくても、出口がないのです。

袋小路になっている基礎には、1台の送風機で風を当てて対流を起こし、もう1台で湿気を外部へ押し出します。「風を送る」だけでなく「出口をつくる」という組み立てで考えます。

図4 送風機の置き方——「風を送る」より「出口をつくる」



※ 水回りの周辺や増築を重ねた家は基礎が複雑で、風の出口がない場所ができる。まず出口を探すこと。

※ 自然乾燥では1か月以上かかることもある。送風を続けても数日では終わらない。

- 送風で乾かす。温風を当て続けると木材のゆがみや火災の原因になるため使わない
- 換気口の位置を確認し、風の入口と出口をつくる
- 自然乾燥では1か月以上かかることもある。送風を継続すれば大幅に短縮できるが、数日で終わるものではない
- 依頼者に「いつまで送風機を回すのか」「電気代はどうするのか」を必ず説明する



袋小路の基礎に2台で対流をつくる

画像：～Inspire～

6-4 石灰について

水害時にかつては石灰を使うことがありましたが、現在は勧めません。水分を多く含んだ土壌に石灰を大量にまくと、吸水・保水した石灰が蓋のようになり、かえって土壌の乾燥を遅らせます。

また、床下に石灰を散布しても消毒液の代わりにはなりません。床下の消毒・乾燥を目的とした消石灰の散布については、方法も効果も明確に示されたものがないと自治体も説明しています。消石灰は水に溶けると強アルカリ性になり、目に入れば失明のおそれもあります。

現場で「石灰をまいてほしい」と頼まれることがあります。その場合は否定せず、「石灰より、まず乾かすほうが効きます」と、理由を添えて説明します。

7. 消毒——乾いてから、必要な範囲に

消毒は、清掃と乾燥が済んだあとの仕上げです。順番を守らなければ、薬剤は浸透せず効果を発揮しません。

7-1 どこを消毒するか

屋内（食事や睡眠をする場所、手の触れる場所）は、泥や汚れを十分に取り除いたうえで消毒します。一方、床下や庭などの屋外は、原則として消毒よりも清掃と乾燥が重要とされています。

ただし次のような場合は、床下でも消毒を行います。

- 下水の逆流など、汚水が混入したおそれがある場合
- 動物の死骸や腐敗物が流れ込んだ場合
- 泥が厚く堆積し、長時間浸水していた場合

7-2 かけ方

- カビ：上部から行う。胞子が舞うため、まず消毒液を一度かけ、布で拭き上げたあと、もう一度消毒液をかける
- 腐朽菌：工程は同じだが、かけ方が違う。腐朽菌は木材の奥まで入り込んでいるため、木部に浸透するくらい十分にかけ、土の表面にも散布する

- 消毒薬は布に含ませるか、薬液に浸す方法で使う。噴霧は吸い込むおそれがあるため、原則として行わない（特に次亜塩素酸ナトリウムは噴霧しない）
- 消毒薬は使う直前に希釈する。作り置きは効果が落ちる

7-3 薬剤の選び分け

薬剤	使いどころ	注意
次亜塩素酸ナトリウム（家庭用塩素系漂白剤でも可）	汚染の程度がひどい場合、長時間浸水していた場合	色あせ・脱色・腐食のおそれ。金属には使わない。噴霧しない。酸性のものと混ぜると有害な塩素ガスが発生する
塩化ベンザルコニウム（逆性石けん／製品名オスバン等）	次亜塩素酸ナトリウムが使えない対象、屋内外の一般的な殺菌	対象を傷めにくい。汚れが残っていると効果が落ちる
消毒用アルコール（エタノール）	殺菌のほか、主にカビ・腐朽菌の除去	70%以上のものを使う。火気のあるところでは使わない

7-4 希釈早見表

市販薬の原液濃度は製品によって異なります。必ず容器の表示を確認してから希釈してください。

図5 消毒液の作り方（500mlペットボトル1本ぶん）

次亜塩素酸ナトリウム 0.02%  + 原液 5% の塩素系漂白剤 キャップ 半分 (約2ml) 主な用途 食器・流し台・浴槽 水 500ml	次亜塩素酸ナトリウム 0.1%  + 原液 5% の塩素系漂白剤 キャップ 2杯 (約10ml) 主な用途 汚染がひどい家具・床 水 500ml	塩化ベンザルコニウム 0.1%  + 原液 10% の逆性石けん キャップ 1杯 (約5ml) 主な用途 家具・床・壁・床下木部 水 500ml
噴霧しない（吸い込みの危険） / 使う直前に希釈する / 酸性のものと混ぜない（有害な塩素ガス） 製品ごとに原液濃度が違います。必ず容器の表示を確認してから希釈してください。ゴム手袋・ゴーグルを着用。		

- 次亜塩素酸ナトリウムは時間とともに原液の濃度が落ちる。開封後数か月以内、または使用期限内の未開封品を使う
- 希釈するときも、肌や目に付かないようゴム手袋とゴーグルを着用する
- 皮膚に付いたらすぐ大量の流水で洗い流す。目に入った場合は15分以上洗い流し、製品を持って医療機関（眼科）を受診する
- 屋内で消毒するときは必ず換気する

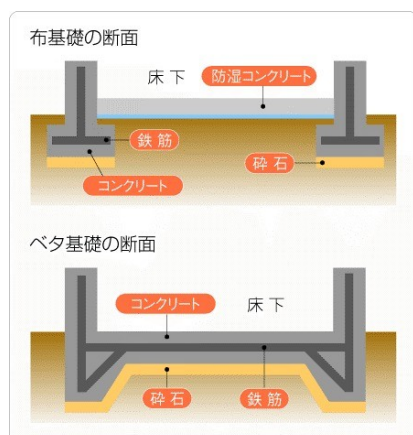
8. 床下環境の改善と引き渡し

作業の完了は、水と泥がなくなった時点ではありません。依頼者がこの先も安心して住める見通しを持てた時点です。

8-1 基礎の違いを理解する

基礎の形式	特徴	水害後の注意
基礎なし（古い住宅）	土がむき出しで通気性は良い	土壌からの湿気が上がりやすい
布基礎	立ち上がりのみ。防湿コンクリートが打たれている場合もある	中基礎の配置により空気がよどむ場所ができる
ベタ基礎	床下全面にコンクリートを打ち、布基礎と一体化。土からの湿気を防ぐ	水抜き穴がないと、流入した水が抜けにくい

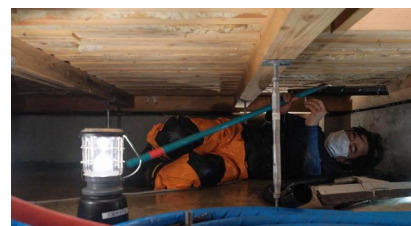
ベタ基礎に見えても布基礎と一体化しておらず、防湿コンクリートにとどまっている場合があります。見た目で判断せず、実際に確認します。



布基礎とベタ基礎の断面



昔の家の床下
基礎がなく通気性は良い



近年の家の床下
画像：YNF／撮影：竹下和輝

8-2 依頼者に伝えること

点検し、調査をすることで、被災された方は初めて本当の意味での安心を得られます。見た目だけの調査と、見えない部分までの点検・調査とは、必要な作業内容そのものが変わります。

- 今日やったこと／やらなかったこと、その理由
- 送風機をいつまで回すか、どう止めるか
- 今後どこを見ておけばよいか（カビ・におい・床のきしみ）
- 専門業者に相談したほうがよい範囲（広範囲のカビ、構造材の腐朽、床下の防腐処理など）
- 困ったときの連絡先

付録 土砂の入った家の床下泥出しの前に 必ず養生をしましょう！

現場で掲示・配布できる 1 枚資料です。印刷して作業場所に貼り出してください。

土砂の入った家の床下泥出しの前に 必ず養生をしましょう！

【床下のドロ出し作業に入る前のお願い】

水害現場復旧作業に入るにあたり、最初に行う作業は現場の養生です。
今以上に現場を汚さぬこと。自分の家(部屋)だと思って作業に当たりましょう。
復旧作業が完了すれば、家主さんはそこで今まで通りの生活を送る場になります。
この為に行うのが養生作業です。

【必要になる資材】

- | | |
|-----------|-------|
| ・養生テープ | ・ハサミ |
| ・ビニールマスカー | ・カッター |
| ・スルーシート | ・メジャー |
| ・土嚢袋 | ・ハケ |



ビニールマスカー

養生テープ

【養生のポイント】

※養生テープを貼る前に、綺麗に掃除してから貼りましょう！
汚れた敷居や柱は、テープが剥がれてしまいます。

① 床(スルーシート)

作業中、床の上はどうしても土足で上がることになります。
予め養生することで、最後の清掃作業も楽になります。



② 壁・襖・障子(ビニールマスカー)

床下のドロ出し作業の際などに飛び散る事があります。
材質によってはシミが取れない為、予め養生することで予防になります。



③ 根太・台所(養生テープ・ビニールマスカー)

床下のドロ出し作業中はどうしても根太を足掛かりにすることになります。
床下の材料と言えども、ドロが付着すればカビの温床となる為、
予め養生しましょう。
台所も公衆衛生上、食中毒や感染症にかかる恐れがありますので、
きちんと養生テープで守りましょう。



特に敷居は重要!!

④ 敷居(養生テープ・スルーシート)

襖や障子の敷居は傷がつきやすくなります。また、その傷にドロが入るとなかなか取れません。
予め養生して保護しておきましょう。



⑤ 撤収作業も丁寧に...

最後に、これらの養生材を剥がす際は下地の素材を傷めぬよう
丁寧に撤去するように心がけましょう。
せっかく汚れを防いでも、最後の最後で傷めてしまえば残念です。

□床下に泥や水がたまっていないか確認する

住宅が一度でも浸水したら、床を上げて床下に水や泥が入り込んでいないか確認することが大切です。
ただし、ハウスメーカーや建築方法によっては専門的な技術が必要になります。
水や泥がたまっている場合は、掃除をしないと後になってカビや悪臭が発生し、生活に支障が出ます。

和室（畳敷きの部屋）

- 畳を上げ、畳の下の床板をバールなどで1枚はがす。(写真①)
- 床板をはがす前に油性ペンで並び順の番号を書いておくといい。(写真②)
- 床下に水や汚泥がたまっていないかどうか確認する。(写真③)
- 確認が終わったら、床板は元に戻すことができる。
- 特に無垢の床板は再利用できるのでいぬいにはがす。



和室の床板をはがす(写真①)



床板に並び順を記入(写真②)



床下にたまった泥(写真③)

□床下を掃除し、泥を除去する

床下に水が入った場合、水を抜いてから泥を取り除きます。
掃除したあとは、床下に消毒剤をまきます。
時間が経つほど、水分が湿気となりカビや臭臭の原因になります。
できるだけ早く作業に着手するようにしましょう。



床下に入るときは安全確保のため、換気をし、2人以上で作業をします

制作 NPO災害ボランティア 愛知人
Daiju.tech

協力 日田市災害ボランティアセンター
被災地NGO協働センター
レスキューアシスト

写真提供 NPO災害ボランティア 愛知人
震災がつなぐ全国ネットワーク
NPO法人愛知ボランティアセンター

制作: NPO 災害ボランティア 愛知人 / Daiju.tech 協力: 日田市災害ボランティアセンター、被災地 NGO 協働センター、レスキューアシスト 写真提供: NPO 災害ボランティア 愛知人、震災がつなぐ全国ネットワーク、NPO 法人愛知ボランティアセンター

参考資料

- 厚生労働省「被災した家屋での感染症対策」（浸水した家屋の感染症対策／消毒手順 ほかリーフレット）
- 日本環境感染学会「一般家屋における洪水・浸水など水害時の衛生対策と消毒方法」（暫定版ガイドス）
- 川崎市／浜松市／松山市／福井市／豊田市ほか各自治体「水害時の衛生対策と消毒方法」
- 災害ボランティア 愛・知・人 九州支部「水害時の家屋点検及び作業の必要性」（内田正寿）
- 「土砂の入った家の床下泥出しの前に必ず養生をしましょう！」制作：NPO 災害ボランティア愛知人／Daiju.tech、協力：日田市災害ボランティアセンター、被災地 NGO 協働センター、レスキューアシスト

※本マニュアルの消毒方法・希釈濃度は、上記の公的資料に基づいています。製品ごとに原液濃度が異なるため、使用前に必ず容器の表示をご確認ください。

災害ボランティア 愛・知・人 aichijin0311@gmail.com <https://www.aichijin.org/>